

瓦屋根のコーキングと緊結

まごひち瓦版

ライフスタイルに関する情報をもっと知りたい
貴方にお届けする地元企業発行のかわら版です

何気なく実家の屋根を見上げた時、「え〜っつ、嘘。コーキングされてる。」ってことが近頃ありました。普段気にも留めない実家の屋根を見上げて思わず出た「あ〜あ、いつコーキングなんかしたの?」という、残念そうな響きを含む私の問いに、「若干耳が悪くなりかけている(聞きたくない言葉は超上手くスルー出来る能力がアップしてきた)母が「台風や地震とかで瓦がズレないようにって業者さんが回ってこられて、ご近所でも沢山してもらってるよ」と、心なしか得意気。コーキング施工を受けるお宅って正にこのタイプが多いんです。ご近所でも何軒かやってもらってるから良かれと思ってウチもしてもらいました...という非常にごもつともな理由。



山部分に数センチだけ塗られた例

孫七では、屋根修理のご依頼を頂くと国家検定試験に合格した、かわらぶぎ技能士資格と、瓦屋根診断技士の資格を持つ熟練の技術者が現場調査に向かいます。その際に修理の必要箇所を撮影した上で、お客様にご提出する見積写真とお見積書を準備するのですが時折、コーキングが施されている現場の写真があります。「自然災害の際に瓦がズレないように」という意図は理解できますし、実際その目的に合った最小限のコーキング施工がされている屋根もあります。

ですが根本的な修理である、瓦の浮き・ズレ・破損・漆喰の傷みを放置してこれでもかとばかりにコーキング剤だけが塗られていく場合など、落下予防には成り得ても雨漏りが止まることはあり得ません。知識のない施工者や業者が塞いではいけない箇所にもコーキング剤を塗ってしまった場合、瓦のズレたり破損した箇所から内に入り込んだ雨水は、流れ出る逃げ場を失ってしまい、雨漏りとなってしまいます。



4 辺全て、もれなく塗られた例
この施工がされた屋根は、ほとんどの案件が中で雨漏りが起きています。

本来なら、多少湿つても自然に吸湿・乾燥・換気が出る仕組みの瓦屋根ですが、不適切なコーキングで隙間を防がれている場合、入り込んだ雨水や結露は乾きにくく、屋根内部の湿気を高めます。



色々な瓦にしっかりと塗られた例

入り込んだ雨水や結露は雨漏りとして天井に滴るだけでなく、下地材や建材、を痛める原因にもなります。不必要なコーキング剤の塗り方は、いざ瓦修理が必要な時に瓦交換に手間や余分な費用がかかるのは言うまでもありません。

私事で恐縮ですが、実家屋根のコーキングは、瓦の特性を理解した施工会社によるものだったようで、瓦根にあるべき隙間を埋めたり、水の流れを妨げる塗り方ではなかったたので幾分安心です。では瓦の下の屋根は一体どのようなものになっているのでしょうか?昔ながらの建材・工法での施工写真が手に入りませんので、葺き替えの際に撮影した記録写真から分かる範囲ですが、過去から現在にかけての屋根材のご紹介をさせていただきます。

●初期の瓦屋根は、竹を編んだ下地の上に土・瓦が並べられたものであったようです。
●木材の加工技術が向上すると、下地は野地板を打ち付けたものに変わり、その上に土・瓦へと移行してきます。



※少しでも雨漏りを防ぐために、板の上に杉皮を敷く場合もあつたようです。
※合板や防水シートが普及してくると土の下にそれらが施工されるようになりました。



●葺き替時に現在もよく遭遇するのは、野地板・合板・防水シート、土・瓦。
瓦の形状改良が進み、棧木に引っ掛ける突起をもたせた形が出来たことで、引っ掛け工法による屋根葺きもありました。

●平成13年8月(2001年)からは、釘などで全ての瓦を棧木に緊結するガイドライン工法へと変わりました。